

大学生のスキー場における不安感に関する考察

福 地 和 夫

- はじめに
- 1 研究の目的
- 2 調査方法
- 3 分析結果と考察
- おわりに

はじめに

近年、スキー人口は減少傾向にあるものの¹⁾、レジャー白書(2008)によると、2007年度のシーズンは約540万人がスキーを行い、余暇活動の潜在需要²⁾としても、10代から20代の若者を中心に依然人気が高いと報告されている。また、平滑なゲレンデの拡張や初心者向けのゲレンデ整備、高速リフトやゴンドラの設置による搬送能力の向上など、スキー場はスキーヤーの多様な志向に合わせて快適な空間へと生まれ変わってきている。さらに、カービングスキーに代表される用具の改良はスキー技術の向上を容易にし、高齢者のスキーへの回帰現象もみられる³⁾。『日本スキー教程』(2003)によると、スキースポーツの楽しさには、自然条件に挑戦する面白さ、フォームなどの観念的価値基準に挑戦する面白さ、他人と勝敗を競う面白さがあり、人間関係や仲間づくりもスキーの周辺的な楽しさであるとしている。

ただし、スキーは転倒や衝突による怪我や傷害が起こりうる危険性を持ったスポーツである。全国スキー安全対策協議会の報告⁴⁾によると2007/08年のスノースポーツの受傷率は0.0103%⁵⁾であり、リフト・ゴンドラなどの輸送人員1万人あたり1人が受傷したことになる。受傷原因は、自分自身の転倒によるものがもっとも多く約75%、次に他人との衝突が約20%、樹木などの障害物との衝突が約3%となっている。また、スキー場におけるスキーヤーのマナーの悪さやゲレンデ整備などの安全性確保の不備が事故の原因ともなっている。こうした危険性に対しスキーヤーの多くは不安感を抱いていると予測される。

そこで、本稿ではスキーヤーのスキー場における不安感、マナーや安全に関する意識を把握する。同時に、スキーの傷害事故防止の観点からだけでなく、スキー指導のための基礎的資料としての活用を目的とする。

1 研究の目的

本学では1971年(昭和46年)度からスキー教室を実施しており⁶⁾、2008年度で38回目となる。開設当初は全学共通科目の体育実技として実施し、2007年度以降はスポーツ経営学科のスポーツ実習の「野外活動」として実施している。スキー教室は、冬季にスキー場で実施され、宿泊を伴う集中講義であり、スキーに対する不安感や緊張感がみられる受講生も多い。そこで、本学のスキー教室では、1999年度から受講生を対象にスキーの安全とマナー、および不安意識の把握をするために、アンケート調査を実施してきた。

本稿では、2006・2007年度のスキー教室に参加した学生のアンケート調査結果を分析することにより、最近の大学生のスキーへの不安感に関する動向、スキー教室参加前と参加後の変化、スキー初心者と経験者との差異、スノーボード未経験者と経験者との差異を考察する。

2 調査方法

(1) 調査対象

2007年と2008年の2月に3泊4日の日程で開催された本学のスキー教室に参加した男子学生53名⁷⁾を調査対象とする。また、スキー初心者20名とスキー経験者33名に、スノーボード未経験者39名と経験者14名に属性を分類できる。

(2) スキー教室の概要

1) 実施場所

長野県北安曇郡小谷村榑池高原スキー場

2) 日程

1日目の午後宿舎に集合し、現地で3泊して4日目の午前中の講習で終了し、現地解散する日程である。スキーの実技講習は天候にもよるが、午前約3時間、午後約3時間行う。夜は宿舎の食堂を利用して、スキーに関する講義と筆記試験などを実施する(表1)。

3) スキー教室の目的

スキーは運動不足になりがちな冬における絶好のスポーツであり、スキー教室は自然のキャンパスの中で、対自然、対人間の関係の素晴らしさを体験することにより、スキー技術の習得だけでなく、健全な人間関係の形成を目的として実施している。

4) 事前指導

12月と1月の2回にわたり、学内でスキーの基礎知識などの講義を行うとともに、スキー教

室参加のための詳細なガイド
ンスを行う。磯貝（2005）で
指摘されているように、ス
キー実習における事前指導
は、スキー技術の指導のため
だけでなく、学生のスキーに
対する認識を高めることがで
きるため重要である。

5) 指導形態

事前のスキー経験に関する
調査および1日目のスキー技
術評価を基に、初心者、初級
者、中上級者⁸⁾にグループ分
けをし、指導を行う。

表1. 日 程 表

	1日目	2日目	3日目	4日目
7:00		起床・朝食		
9:00		実技講習	実技講習	実技講習
12:00		昼 食		閉校式・昼食 現地解散
13:00	現地集合	実技講習	実技講習	
14:30	開校式 実技講習			
17:00	入浴・夕食			
19:00	班別会議	講 義	筆記試験	
21:00	自由時間			
22:30	消 灯			

(3) 調査項目

スキーの安全やマナー、および不安に関する質問36項目（赤井（1994））とスノーボーダーに関する質問6項目⁹⁾を合わせた42項目であり、それぞれの項目に対し、「5. 思う」「4. やや思う」「3. どちらでもない」「2. やや思わない」「1. 思わない」の5段階評定尺度を用いて1点から5点までを評定する形式とした。

(4) 調査手順

事前調査はスキー教室が始まる開校式の前にスキー場で実施する。

事後調査は3泊4日のスキー教室が終了する閉校式の前にスキー場で実施する。

3 分析結果と考察

(1) 事前調査

1) 全体の動向

評点の高い項目は、「ゲレンデは危険な場所である」（4.02点¹⁰⁾）、「スキーは危険なスポーツである」（3.98点）、「怪我をするかもしれない」（3.92点）、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」（3.83点）、「事故の加害者または被害者になるかもしれない」（3.72点）であった。スキーそのものを危険なスポーツと捉えている受講生が多いと同時に、スキーヤーがスノーボーダーと同じゲレンデで滑ることへの不安感が高いようである。

表2. 全体の分析結果

設 問		全 体 n = 53				t 値
		事 前		事 後		
		平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
1	ゲレンデの整備が悪い	2.45	1.12	1.83	0.98	3.05 **
2	危険なスキーヤーが多い	2.94	1.22	2.58	1.22	1.52
3	スキーのかつぎ方を知らない人が多い	2.66	1.02	2.09	1.02	2.85 **
4	事故の加害者になるかもしれない	3.72	1.28	3.58	1.38	0.51
5	帽子をかぶらない人が目立つ	2.26	1.04	2.02	1.25	1.10
6	締め具の調整方法を知らない人が多い	3.09	1.01	2.43	1.35	2.85 **
7	怪我をするかもしれない	3.92	1.14	3.72	1.39	0.84
8	だらしない服装の人が目立つ	2.64	0.94	2.42	1.17	1.10
9	ゲレンデは危険な場所である	4.02	1.12	3.92	1.24	0.41
10	ぶつかっても謝らない人が多い	2.64	1.02	2.13	1.16	2.40 *
11	他人のすぐ脇を追い越す人が多い	3.42	0.93	3.25	1.25	0.79
12	マナーの悪い人が多い	2.91	0.95	2.89	1.09	0.10
13	危険な転び方をする人が多い	3.26	0.92	3.04	1.29	1.04
14	暴走スキーヤーが多い	2.89	0.99	3.02	1.28	-0.59
15	コース内を靴で歩く人が多い	2.19	0.98	1.79	0.99	2.07 *
16	他人と衝突するかもしれない	3.68	1.25	3.51	1.37	0.67
17	酒気おびスキーヤーが多い	2.19	0.92	2.04	1.18	0.74
18	傷害保険をかけない人が多い	3.06	1.03	2.66	1.07	1.94 *
19	リフト待ちの列に割り込む人が多い	2.36	1.00	2.06	1.08	1.49
20	転倒しても速やかに立たない人が多い	3.34	0.98	3.62	1.20	-1.33
21	他人にとって邪魔なところで止まる人が多い	3.66	0.98	3.91	1.15	-1.18
22	コースの案内表示が分かりにくい	2.79	1.03	2.47	1.32	1.39
23	個人賠償責任保険を知らない人が多い	3.68	1.09	2.98	1.18	3.16 **
24	スキーは危険なスポーツである	3.98	1.23	3.85	1.34	0.53
25	リフト乗り場で次の人に迷惑する人が多い	2.81	0.96	2.32	1.30	2.21 *
26	安全についての意識の低い人が多い	3.28	1.01	3.19	1.19	0.44
27	自分の技量以上のコースを滑る人が多い	3.43	0.95	3.26	1.21	0.80
28	危険な場所で止まる人が多い	3.47	1.07	3.57	1.20	-0.43
29	パトロールの指導や取り締まりが少ない	3.09	0.99	3.08	1.12	0.09
30	コースの真ん中で立ち止まる人が多い	3.36	0.98	3.75	1.05	-2.00 *
31	ゲレンデにゴミを捨てる人が目立つ	2.58	1.03	2.00	1.07	2.87 **
32	スピードコントロールが出来ない人が多い	3.13	0.98	3.13	1.26	0.00
33	樹木や障害物にぶつかるかもしれない	3.30	1.39	2.79	1.46	1.84 *
34	止まらないスキーヤーが多い	3.06	0.99	2.70	1.20	1.68 *
35	自信過剰なスキーヤーが多い	3.19	0.98	3.09	1.26	0.43
36	事故の被害者になるかもしれない	3.72	1.21	3.64	1.32	0.31
37	危険なスノーボーダーが多い	3.51	0.97	3.91	1.27	-1.80 *
38	スノーボーダーとぶつかるかもしれない	3.83	1.07	3.96	1.11	-0.62
39	暴走スノーボーダーが多い	3.15	0.93	3.68	1.24	-2.49 **
40	止まらないスノーボーダーが多い	3.02	0.89	3.45	1.25	-2.06 *
41	自信過剰なスノーボーダーが多い	3.28	0.91	3.57	1.29	-1.30
42	マナーの悪いスノーボーダーが多い	3.17	0.83	3.51	1.31	-1.60

* : 5% 水準で有意

** : 1% 水準で有意

評点の低い項目は、「コース内を靴で歩く人が多い」(2.19点)、「酒気おびスキーヤーが多い」(2.19点)、「帽子をかぶらない人が目立つ」(2.26点)、「リフト待ちの列に割り込む人が多い」(2.36点)、「ゲレンデの整備が悪い」(2.45点)、「ゲレンデにゴミを捨てる人が目立つ」(2.58点)であり、マナーに関する項目が多い(表2)。

6分類したカテゴリー¹¹⁾の結果は表4のとおりである。もっとも平均点が高かったカテゴリー

表 3. 初心者と経験者の分析結果

設問	初 心 者 n=20					経 験 者 n=33					初心者と経験者の比較	
	事 前		事 後		t 値	事 前		事 後		t 値	t 値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		平均	標準偏差	平均	標準偏差		事 前	事 後
1	2.70	0.86	1.95	1.23	2.23 *	2.30	1.24	1.76	0.79	2.13 *	1.26	0.69
2	3.10	1.25	2.74	1.24	0.92	2.85	1.20	2.45	1.20	1.33	0.73	0.82
3	2.90	0.79	2.09	0.94	2.93 **	2.52	1.12	2.18	1.07	1.23	1.34	-0.30
4	4.00	0.97	3.58	1.15	1.23	3.55	1.42	3.45	1.50	0.25	1.26	0.33
5	2.35	0.93	2.02	1.35	0.90	2.21	1.11	2.12	1.19	0.32	0.46	-0.29
6	3.15	0.88	2.43	1.30	2.04 *	3.06	1.09	2.52	1.39	1.77 *	0.31	-0.21
7	4.25	0.79	3.72	1.17	1.70 *	3.73	1.28	3.48	1.48	0.71	1.64 *	0.60
8	2.75	0.85	2.42	1.05	1.11	2.58	1.00	2.42	1.25	0.54	0.65	-0.03
9	4.25	1.02	3.92	0.98	1.03	3.88	1.17	3.70	1.33	0.59	1.18	0.66
10	3.05	0.89	2.13	1.01	3.06 **	2.39	1.03	2.09	1.26	1.07	2.37 *	0.12
11	3.55	1.05	3.25	1.19	0.86	3.33	0.85	3.06	1.27	1.02	0.82	0.52
12	3.15	0.99	2.89	1.24	0.74	2.76	0.90	2.94	1.00	-0.78	1.48	-0.17
13	3.20	1.06	3.04	1.29	0.43	3.30	0.85	3.00	1.30	1.12	-0.39	0.10
14	2.85	0.81	3.02	1.21	-0.52	2.91	1.10	2.97	1.33	-0.20	-0.21	0.13
15	2.00	0.97	1.79	0.69	0.78	2.30	0.98	2.00	1.09	1.19	-1.09	-0.76
16	4.05	1.23	3.51	1.19	1.41	3.45	1.23	3.24	1.41	0.65	1.71 *	0.71
17	2.35	0.99	2.04	0.94	1.02	2.09	0.88	2.30	1.24	-0.80	0.99	-0.82
18	3.00	1.08	2.66	0.94	1.06	3.09	1.01	2.79	1.14	1.14	-0.31	-0.42
19	2.45	0.83	2.06	0.97	1.38	2.30	1.10	2.09	1.16	0.76	0.51	-0.11
20	3.25	0.91	3.62	1.17	-1.13	3.39	1.03	3.45	1.20	-0.22	-0.51	0.50
21	3.80	0.83	3.91	1.24	-0.32	3.58	1.06	3.97	1.10	-1.48	0.81	-0.20
22	3.10	0.79	2.47	1.39	1.75 *	2.61	1.12	2.48	1.30	0.41	1.73 *	-0.03
23	3.65	1.09	2.98	1.15	1.89 *	3.70	1.10	2.94	1.22	2.64 **	-0.15	0.12
24	4.40	0.82	3.85	1.20	1.70 *	3.73	1.38	3.64	1.39	0.27	1.98 *	0.57
25	3.10	0.85	2.32	1.28	2.27 *	2.64	0.99	2.24	1.32	1.37	1.73 *	0.21
26	3.40	1.05	3.19	1.08	0.63	3.21	0.99	3.30	1.26	-0.33	0.65	-0.34
27	3.50	0.95	3.26	0.97	0.78	3.39	0.97	3.27	1.35	0.42	0.39	-0.02
28	3.70	0.86	3.57	1.14	0.42	3.33	1.16	3.52	1.25	-0.61	1.22	0.15
29	3.20	1.11	3.08	0.97	0.38	3.03	0.92	2.97	1.21	0.23	0.60	0.33
30	3.30	1.03	3.75	0.83	-1.54	3.39	0.97	3.64	1.17	-0.92	-0.33	0.40
31	2.60	1.14	2.00	1.04	1.74 *	2.58	0.97	2.09	1.10	1.90 *	0.08	-0.30
32	3.45	0.94	3.13	1.31	0.88	2.94	0.97	2.97	1.21	-0.11	1.88 *	0.46
33	4.05	0.89	2.79	1.42	3.35 **	2.85	1.46	2.58	1.46	0.76	3.32 **	0.53
34	3.30	0.92	2.70	1.15	1.82 *	2.91	1.01	2.64	1.25	0.98	1.41	0.18
35	3.35	0.88	3.09	1.18	0.78	3.09	1.04	2.94	1.30	0.52	0.93	0.44
36	4.10	0.97	3.64	0.85	1.59	3.48	1.30	3.36	1.48	0.35	1.83 *	0.77
37	3.30	0.80	3.91	1.46	-1.63	3.64	1.06	4.06	1.14	-1.57	-1.23	-0.43
38	3.90	1.07	3.96	1.12	-0.18	3.79	1.08	3.94	1.12	-0.56	0.37	0.07
39	2.95	0.94	3.68	1.32	-2.01 *	3.27	0.91	3.79	1.19	-1.97 *	-1.23	-0.31
40	3.05	0.76	3.45	1.17	-1.29	3.00	0.97	3.55	1.30	-1.93 *	0.20	-0.26
41	3.15	0.93	3.57	1.19	-1.23	3.36	0.90	3.67	1.36	-1.07	-0.83	-0.27
42	3.10	0.55	3.51	1.35	-1.26	3.21	0.96	3.61	1.30	-1.40	-0.48	-0.26

* : 5% 水準で有意
** : 1% 水準で有意

は「危険の予知」(3.57点), 次いで「転倒・衝突の原因」(3.38点)であった。それに対して「マナー・迷惑」(2.54点)に関する評点は低い。すなわち, 受講生は「危険の予知」や「転倒・衝突の原因」など自分自身に直接危険が及ぶ可能性が高いことへの不安感が高いが, 「マナー・迷惑」といった身体的な直接的影響が低いと捉えられる項目への不安感は相対的に低いと推察される。

表 4. カテゴリー別分析結果

	設 問		事前	事後	有 意 差		
					全 体	初心者	経験者
マナー・迷惑	8	だらしない服装の人が目立つ	2.64	2.42			
	10	ぶつかっても謝らない人が多い	2.64	2.13	*	**	
	12	マナーの悪い人が多い	2.91	2.89			
	15	コース内を靴で歩く人が多い	2.19	1.79	*		
	17	酒気おびスキーヤーが多い	2.19	2.04			
	19	リフト待ちの列に割り込む人が多い	2.36	2.06			
	25	リフト乗り場で次の人に迷惑なる人が多い	2.81	2.32	*	*	
31	ゲレンデにゴミを捨てる人が目立つ	2.58	2.00	**	*	*	
	平均	2.54	2.21				
	標準偏差	0.27	0.34				
危険の予知	9	ゲレンデは危険な場所である	4.02	3.92			
	20	転倒しても速やかに立たない人が多い	3.34	3.62			
	21	他人にとって邪魔なところで止まる人が多い	3.66	3.91			
	28	危険な場所で止まる人が多い	3.47	3.57			
	30	コースの真ん中で立ち止まる人が多い	3.36	3.75	*		
	平均	3.57	3.75				
	標準偏差	0.28	0.16				
転倒・衝突の原因	2	危険なスキーヤーが多い	2.94	2.51			
	4	事故の加害者になるかもしれない	3.72	3.58			
	11	他人のすぐ脇を追い越す人が多い	3.42	3.25			
	13	危険な転び方をする人が多い	3.26	3.04			
	14	暴走スキーヤーが多い	2.89	3.02			
	16	他人と衝突するかもしれない	3.68	3.51			
	24	スキーは危険なスポーツである	3.98	3.85		*	
	27	自分の技量以上のコースを滑る人が多い	3.43	3.26			
	32	スピードコントロールが出来ない人が多い	3.13	3.13			
	34	止められないスキーヤーが多い	3.06	2.70	*	*	
	36	事故の被害者になるかもしれない	3.72	3.64			
	平均	3.38	3.23				
	標準偏差	0.36	0.41				
安全に対する意識・情報	1	ゲレンデの整備が悪い	2.45	1.83	**	*	*
	3	スキーのかつき方を知らない人が多い	2.66	2.09	**	**	
	5	帽子をかぶらない人が目立つ	2.26	2.02			
	6	締め具の調整方法を知らない人が多い	3.09	2.43	**	*	*
	7	怪我をするかもしれない	3.92	3.72		*	
	22	コースの案内表示が分かりにくい	2.79	2.47		*	
	26	安全についての意識の低い人が多い	3.28	3.19			
	29	パトロールの指導や取り締まりが少ない	3.09	3.08			
	33	樹木や障害物にぶつかるかもしれない	3.30	2.79	*	**	
	35	自信過剰なスキーヤーが多い	3.19	3.09			
	平均	3.01	2.67				
	標準偏差	0.48	0.60				
保 険	18	傷害保険をかけない人が多い	3.06	2.66	*		
	23	個人賠償責任保険を知らない人が多い	3.68	2.98	**	*	**
		平均	3.37	2.82			
	標準偏差	0.44	0.23				
スノーボーダー	37	危険なスノーボーダーが多い	3.51	3.91	*		
	38	スノーボーダーとぶつかるかもしれない	3.83	3.96			
	39	暴走スノーボーダーが多い	3.15	3.68	**	*	*
	40	止められないスノーボーダーが多い	3.02	3.45	*		*
	41	自信過剰なスノーボーダーが多い	3.28	3.57			
	42	マナーの悪いスノーボーダーが多い	3.17	3.51			
	平均	3.33	3.68				
	標準偏差	0.30	0.21				

* : 5% 水準で有意

** : 1% 水準で有意

2) 初心者への動向

評点の高い項目は、「スキーは危険なスポーツである」(4.40点)、「怪我をするかもしれない」(4.25点)、「ゲレンデは危険な場所である」(4.25点)、「他人や樹木や障害物と衝突するかもしれない」(4.05点)、「事故の被害者になるかもしれない」(4.10点)であり、全体的な動向と比較すると評定平均値が4点以上の項目が多く、初心者はより高い不安感を抱いているといえる(表3)。初心者はスキー経験がないために、マスメディアなどの視聴覚情報から作り上げたイメージで回答していることにより経験者よりも大きな不安を持っているという赤井(1990・1991)の報告と整合的な結果となった。

3) 経験者の動向

評点の高い項目は、「ゲレンデは危険な場所である」(3.88点)、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」(3.79点)、「スキーは危険なスポーツである」(3.73点)、「怪我をするかもしれない」(3.73点)、「個人賠償責任保険を知らない人が多い」(3.70点)であり、全体的な動向と類似している(表3)。全体の動向としてもいえることであるが、「個人賠償責任保険を知らない人が多い」という設問の評点が高いことは、傷害保険料は本学のスキー教室参加費項目に明示して徴収し¹²⁾、受講生は既に個人賠償責任保険に対する知識があるものの、一般的には知られていないのではという懸念の表れとも考えられる。スキー場で発生する事故に関して、水沢他(1997)によれば、自分が被害者になることについて77.5%、加害者になることについては62.6%の者がその可能性があると感じており、実際スキー場での怪我の受傷者の傷害保険平均加入率は28.7%という報告¹³⁾もある。個人賠償責任保険に加入する意義は大きく、本学のスキー教室受講生は傷害保険に加入することで存在を周知する役割も担っているといえる。

4) 初心者と経験者の比較

事前調査において初心者と経験者の評定結果に有意な差が認められた項目は、「樹木や障害物にぶつかるかもしれない」、「ぶつかっても謝らない人が多い」、「スキーは危険なスポーツである」、「事故の被害者になるかもしれない」、「コース内の案内表示が分かりにくい」、「リフト乗り場で次の人に迷惑になる人が多い」、「スピードコントロールが出来ない人が多い」、「他人と衝突するかもしれない」、「怪我をするかもしれない」の9項目であった(表3)。9項目すべてにおいて初心者の方が高い評定となっており、スキーの経験がないことはスキー場における高い不安感につながると考えられる。とくに、「コース内の案内表示が分かりにくい」という項目は初心者の事前調査においてのみ高い不安感を示しており、まさしくスキー未経験者であることが原因と示唆される。また、「ゲレンデは危険な場所である」、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」、「危険なスノーボーダーが多い」の項目はどちらの属性についてもともに高い評価をしており差異が認められなかった。ただし、赤井(1994)では今回の調査より質問項目が少ないにもかかわらず、24項目において差が認められたが、その調査対象が女子学生であるため、男子学生を対象とした本稿の調査結果との単純な比較は注意を要する。

(2) 事後調査

1) 全体の動向

評点の高い項目は、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」(3.96点)、「ゲレンデは危険な場所である」(3.92点)、「危険なスノーボーダーが多い」(3.91点)、「他人にとって邪魔なところで止まる人が多い」(3.91点)、「スキーは危険なスポーツである」(3.85点)であった。事後調査においても、スキーヤーにはスノーボーダーと同じゲレンデで滑ることへの不安感がみられると同時に、スキーそのものを危険なスポーツと捉えている受講生が多いようである。

評点の低い項目は、「コース内を靴で歩く人が多い」(1.79点)、「ゲレンデの整備が悪い」(1.83点)、「ゲレンデにゴミを捨てる人が目立つ」(2.00点)、「帽子をかぶらない人が目立つ」(2.02点)、「酒気おびスキーヤーが多い」(2.04点)であり、マナーに関する項目が多かった(表2)。

カテゴリー別の結果は、「危険の予知」(3.75点)、次いで「スノーボーダー」(3.68点)であり、「マナー・迷惑」(2.21点)に関する不安感は低かった。このことは、スキー教室においてスキーを経験することによって、スノーボーダーに関する不安感がより高まったといえる(表4)。

2) 初心者の動向

評点の高い項目は、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」(3.96点)、「ゲレンデは危険な場所である」(3.92点)、「危険なスノーボーダーが多い」(3.91点)、「他人にとって邪魔なところで止まる人が多い」(3.91点)、「スキーは危険なスポーツである」(3.85点)であり、全体的な動向とすべて同じ項目となった。すなわち、スキー初心者は3泊4日のスキー教室を体験することにより、スキーに対する不安感はスキー経験者と類似する傾向がみられる。事前調査では評定平均値が4点以上の項目が多く出現していたが、事後調査では4点以上の項目は一つもなかった(表3)。このことは矢野他(2001)の報告と同じく、スキー教室を行ったことで緊張や不安などの教室実施前のネガティブな気分が、スキー教室を行うにしたがって緩和されてきたとも考えられる。

3) 経験者の動向

評点の高い項目は、「危険なスノーボーダーが多い」(4.06点)、「他人にとって邪魔なところで止まる人が多い」(3.97点)、「スノーボーダーとぶつかるかもしれない」(3.94点)、「暴走スノーボーダーが多い」(3.79点)、「ゲレンデは危険な場所である」(3.70点)であり、全体的な動向と比較するとスノーボーダーに関する項目が高い評点平均値を示したことが特徴的であろう(表3)。

4) 初心者と経験者の比較

両属性間には事前調査においては9項目で有意差が認められたが、事後調査ではすべての項目において差異は認められなかった(表3)。赤井(1994)は、事前調査において24項目において差が認められた項目数が事後調査では9項目に減ったと報告している。先述したとおり、赤井の調査対象は女子学生であるのに対し、本稿の調査対象は男子学生であることに加え、受講生の多くがスポーツ経営学科の学生であること¹⁴⁾が影響している可能性が高い。換言すれば、本学のスポーツ経営学科の学生は相対的に運動能力が高く¹⁵⁾、スキー初心者であったとしても、一般の女子学生よりは、体力的にも精神的にも、スキー技術を獲得する能力が優れているため、技術の

向上が不安感の解消につながったと推察できる。すなわち、スキー経験の積み重ねやスキー技術の向上は、スキーに対する不安感の軽減につながることが示唆された。

（3） 事前事後の調査比較

1) 全体の動向

事後調査において評価が高くなったのは4項目、低くなったのは11項目であった。カテゴリー別にみると、高くなったのは「スノーボーダー」に関する3項目と「危険の予知」に関する1項目であった。低くなったのは「マナー・迷惑」と「安全に対する意識・情報」に関するそれぞれ4項目、「保険」に関する2項目、「転倒・衝突の原因」に関する1項目であった（表4）。このことは、6分類したカテゴリーのうち、「マナー・迷惑」、「安全に対する意識・情報」、「保険」に関する項目の不安感は軽減されたが、「危険の予知」、「転倒・衝突の原因」、「スノーボーダー」に関する項目の不安感は軽減しなかったといえる。

2) 初心者の動向

初心者において評価が高くなった項目は「暴走スノーボーダーが多い」の1項目のみであり、低くなったのは12項目であった。低くなった項目をカテゴリー別にみると、「安全に対する意識・情報」に関する6項目、「マナー・迷惑」に関する3項目、「転倒・衝突の原因」に関する2項目、「保険」に関する1項目であった。全体の動向と比較して、初心者のみが評価の低くなった項目は、「スキーは危険なスポーツである」、「怪我をするかもしれない」、「コース内の表示が分かりにくい」の3項目であった（表4）。とくに初心者は、スキー教室を経験することにより6分類したカテゴリーのうち「マナー・迷惑」、「安全に対する意識・情報」、「保険」に関する項目の不安は軽減され、さらに「スキーは危険なスポーツである」、「怪我をするかもしれない」といった不安感も軽減されたといえる。田原他（1997）による「指導者からのアドバイスを重要視することによって安全やマナー意識が高まった」と同様に、本学のスキー教室においても指導者からのアドバイスが受講生の不安感に対する意識に大きく影響していると考えられる。

3) 経験者の動向

経験者は、評価が高くなったのは2項目、低くなったのは4項目であった。評価が低くなった項目数は初心者の3分の1と少なく、スキー教室参加前に既にスキーを経験しているため事後調査における評価は大きく変化しなかったと考えられる。ただし、評価が高くなった項目は「暴走スノーボーダーが多い」、「止まれないスノーボーダーが多い」の2項目であり、スノーボーダーに対する不安感はむしろ高まったといえる（表4）。スキー技術が向上するにつれて、急斜面での滑走や高速でのターン場面などにおいて、スノーボーダーに対する不安感や危険を感じる機会が多くなったとも推察される。

（4） スノーボード未経験者と経験者との違い

スノーボード未経験者と経験者の違いを「スノーボード」に関するカテゴリーの6項目に着目

表5. スノーボード未経験者と経験者に関する分析結果

設問	未経験者 n=14				
	事前		事後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
37	3.38	0.99	3.97	1.29	-2.24 *
38	3.92	1.09	4.10	1.12	-0.71
39	3.10	0.94	3.74	1.23	-2.55 *
40	2.87	0.73	3.38	1.31	-2.11 *
41	3.26	0.82	3.51	1.32	-1.02
42	3.21	0.80	3.56	1.29	-1.45

設問	経験者 n=39				
	事前		事後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
37	3.86	0.86	3.71	1.27	0.34
38	3.57	1.02	3.57	1.02	0.00
39	3.29	0.91	3.50	1.29	-0.49
40	3.43	1.16	3.64	1.08	-0.49
41	3.36	1.15	3.71	1.27	-0.75
42	3.07	0.92	3.36	1.39	-0.62

設問	未経験者と経験者の差	
	事前	事後
	t 値	t 値
37	-1.58	0.65
38	1.06	1.56
39	-0.63	0.63
40	-2.08 *	-0.66
41	-0.35	-0.50
42	0.52	0.50

* : 5% 水準で有意

** : 1% 水準で有意

したといえる。また、未経験者と経験者の比較では有意な差が認められた項目はなかった(表5)。一方、事前調査では6項目中4項目でスノーボード経験者の方が未経験者より高い不安を抱いていたが、事後調査では2項目に減り、スノーボード未経験者の不安感が高まったと推察される。ただし、スノーボード未経験者39名のうち約半数の18名がスキー初心者であるため、スキー場におけるスノーボーダーに対する危険予知情報が少なかったとも考えられる。

3) 事前事後の調査比較

スノーボード未経験者の平均評定値は6項目すべて事後調査の方が高く、3項目においては有意な差が認められた(表5)。このことは、スノーボード未経験者は、スキー教室中にスノーボーダーに対する不安感や危険度が増加したといえる。すなわち、スキー教室においてスノーボーダーとの衝突の不安や、スノーボーダーの行動に危険を感じた経験をしたと推察される。それに対してスノーボード経験者は、事前事後との調査結果に明確な違いは認められなかった。スノーボード経験者は自らの経験によりスノーボーダーの滑りや行動に対する危険や不安を未経験者よ

して分析する。

1) 事前調査

全体の平均評定値は6項目すべて3点以上となり、「スノーボーダー」に対する不安感や危険性を感じている受講生が多いと推察される。未経験者と経験者を比較すると「止まれないスノーボーダーが多い」項目において経験者の方が未経験者より不安感が高く、両属性間には有意な差が認められた(表5)。また、6項目中4項目でスノーボード経験者の方が未経験者より高い不安感を抱いていたことから、経験者の方がスノーボードの危険性をより認識しているといえる。水沢(1996)によれば、スノーボーダーのマナーの悪いことについて、スキーヤーは強く感じているとともに、スノーボーダーも同様に感じており、本調査は整合的である。

2) 事後調査

全体の平均評定値は6項目すべての事前調査より高い値を示し、スキー教室中にスノーボーダーに対する不安感が増長

りは認識していたと考えられる。

おわりに

スキー教室参加男子学生のスキーに関する安全とマナー、およびスキーとスノーボードへの不安意識についての調査分析を行った結果、次のことが明らかになった。

事前調査ではスキー初心者も経験者もスキーを危険なスポーツであると認識する学生が多く、さらに初心者の方が、その傾向が強いことが明らかになった。

事後調査では、スキーが危険なスポーツであるという不安感は、事前調査より相対的に軽減されたものの依然高かった。一方、スノーボーダーに対する不安感は事前調査よりも高まり、スキー教室中に実際に危険な体験をしていると推察される。

調査の事前事後における比較では、事後評価が低い項目は11、高い項目は4であった。「マナー・迷惑」、「安全に対する意識・情報」、「保険」の категорияに属する項目への不安感は軽減されたが、「危険の予知」、「転倒・衝突の原因」、「スノーボーダー」に属する項目への不安感は軽減される度合いが弱い傾向がみられた。また、初心者グループでは、女子学生よりも男子学生の方が、同じく体力がより優れている方が、不安感の軽減が目立った。

さらにスノーボードの経験の有無がスノーボーダーに対する不安感に与える影響を考察した結果、未経験者グループの事前調査では不安の程度は低かったが、事後調査では不安の程度が高まったことが明らかになった。一方、経験者グループは事前事後ともに高い値を示し、スノーボーダーの滑りや行動に対する危険や不安をスキー教室参加以前から認識していたと推察される。

以上のことから、スキー指導において、スキー場における実技講習では、受講生の属性やゲレンデの状況、天候に関する情報、およびスノーボーダーの滑りや行動などを把握し、総合的な判断に基づいて事故のない指導を心がけることが重要である。また、スキーの基礎的な技術の知的理解を深めるだけでなく、安全やマナーに関する知識や、不安を軽減させる情報を予め教示することが必要である。

付記：長年にわたり本学のスキー教室で指導に携わっていただきました小野勝敏先生をはじめとする専任教員および非常勤の先生方のご協力に心より感謝申し上げます。

〔注〕

- 1) レジャー白書の「余暇活動への参加・消費の実態」によると、スキー参加人口は2005年度710万人、2006年度610万人である。
- 2) 潜在需要とは「参加希望率」と現在の「参加率」との差であり、まだ実現していない需要の大きさといった意味である。
- 3) レジャー白書の「性・年代別余暇活動参加率の特徴」によると、60代以上のスキー参加率は最近増加傾向にある。

- 4) 全国スキー安全対策協議会 <http://www.safety-snow.com/2007-2008kekka/index.html>
- 5) 受傷率の詳細は、スキーヤー 0.0076%、スノーボーダー 0.0131% である。
- 6) スキー教室は、2009年3月に定年退職された小野勝敏先生が本学に赴任なさった1971年度から始まり、毎年、第1部(昼間部)と第2部(夜間部)の2回開催していた。第2部のスキー教室は1984年度まで続いた。
- 7) 女子学生の参加者は数人であったため男子学生に限定した。
- 8) グループ分けは、初心者グループはスキー経験無しの者、初級者グループはプルークボーゲンができる程度の者、中上級グループはシュテムターン以上の技術ができる者とした。
- 9) スノーボーダーに関する質問は筆者が作成した。
- 10) 以下、括弧内の値は評定の平均値を示す。
- 11) 赤井(1994)が分類した5つのカテゴリーと「スノーボーダー」に関するカテゴリーを合わせた6つのカテゴリーとする。
- 12) 本学のスキー教室では、傷害保険に加入するための保険料を徴収している。
- 13) 全国スキー安全対策協議会 <http://www.safety-snow.com/2007-2008kekka/index.html>
- 14) 調査対象者53名のうち、スポーツ経営学科の学生は44名(約88%)であった。
- 15) 福地他(2008)や高橋他(2008)の報告によると、本学スポーツ経営学科の男子学生の体力・運動能力は全国平均値と比較すると大きく上回っている。

〔引用・参考文献〕

- 赤井利男(1990)「アルペンスキーにおける男女大学生の不安について」『青山学院大学文学部紀要』33, pp.180-190
- 赤井利男(1991)「アルペンスキーにおける男子大学生の不安の分析」『日本スキー学会誌』Vol.1 No.1, pp.88-94
- 赤井利男(1994)「女子大学生におけるスキーのマナーと安全に関する研究」『日本スキー学会誌』Vol.4 No.1, pp.135-144
- 磯貝浩久(2005)「スキー実習が学生の自己効力感に及ぼす影響」『大学体育学』第2号, pp.25-36
- (財)全日本スキー連盟(2003)『日本スキー教程』スキージャーナル(株), pp.10-11
- 高橋正紀, 岸 順治, 大野貴司, 福地和夫, 小野勝敏(2008)「本学スポーツ経営学科入学生の体格・体力と生活習慣」『岐阜経済大学論集』41巻3号, pp.37-55
- 田原武彦, 安田正純, 児玉公正, 志水正俊, 内山憲一(1997)「スキーヤーの安全とマナーに対する意識」『日本スキー学会誌』Vol.7 No.1, pp.73-78
- 福地和夫, 小野勝敏, 高橋正紀, 岸 順治, 大野貴司(2008)「本学学生の体力と生活習慣の特徴に関する一考察」『岐阜経済大学論集』41巻3号, pp.1-23
- 水沢利栄(1996)「スキーとスノーボードの共存に関する研究」『日本スキー学会誌』Vol.6 No.1, pp.118-126
- 水沢利栄, 高見 彰(1997)「スキー場入場者保険に関するスキーヤーとスノーボーダーの意識調査」『日本スキー学会第8回大会号』pp.21-22
- 矢野宏光, 植木章三(2001)「メンタルヘルスの増進に向けて身体運動が果たす役割」『日本スキー学会誌』Vol.11 No.1, pp.225-233
- 『レジャー白書』(2008)(財)社会経済生産性本部, pp.10-23